

日本語教員主導型 学生ボランティア・チューター・システムの内容と 効果に関する研究

—チューターへのインタビュー調査から—

松下達彦, 半谷優子

キーワード: チューター、自律学習、留学生、サポート、ネットワーク、日本語教員養成

要旨: 日本語教員の主導による、文科系中心の私立大学における、学生ボランティア・チューター34名を対象に半構造的インタビューを実施した。チューター学生には異文化指向性の非常に高い学生が選任されており、チュートリアルの内容は、日本語サポートと日常生活や文化についての話題が高い割合を占めるが、勉強のサポートに関しては、アジア系の学生が大半を占める学部・大学院留学生対象のほうが、書くことのサポートが多く、内容も幅広い。多くのチューターが話し方や内容について相手に配慮をしているが、学部・院留学生に対しては、文化的な面への配慮が多いのに対し、英語圏出身学生を中心とする1年コース留学生に対してはわかりやすさや学習効果面への配慮が目立ち、困難点の大半も日本語初中級レベルの学生に対する言語サポートの問題である。チューター学生の期待と効果を比較すると、先行研究同様、他者理解、援助や交流への効力感はあるが、それに加えて、日本語に対する気づきや、日本語教員養成へのプラスの効果が、日本語教員主導のシステムの特徴として指摘できる。一方、日本語教員の主導であるため、留学生の言語について学ぶことや、留学で学んだ知識や言語を活かし、忘れないようにするといった目的は期待はずれに終わることが多い。事前連絡のなかった変更や中止を経験した学生も4分の1ぐらいおり、このようなケースでは交流が十分にできていなかったと考えられる。チューター経験者によるシステムの改善に関する提言は「チュートリアルへの支援、システムの整備」と「ネットワーク化の要望」の2点に大別される。

1. 問題の設定

本稿でいうチューターとは、一般に授業外の時間を活用し、いわゆる外国人留学生などに対して学習や生活面での個別的援助をする学生を指すものとする。

日本の大学におけるチューターは主として国立大学において謝金が支払われる形で運用されてきており、その効果や問題点に関する研究や報告として碓氷(1982)、権藤・白土(1988)、田中(1995)(1996)、田中ほか(1996)、村田(1996)、瀬口ほか(1997)、瀬口・田中(1999)、桜田ほか(2000)、山崎(2002)、吉川(2003)などがある。これらの研究や報告では、主として異文化間心理や留学生支援システムの問題が追究されている。学内外のボランティアの活用例として大島(1999)、

大島・永淵(1999)、金田(2001)などの報告もある。

一方、日本語学習支援の一環としてチューターの活用を考える日本語教員も少なくない(岡崎(1990)、松下(1998)、三牧ほか(1999)、岡田(1999)、松本(2001)など)。近年の言語学習理論においては、学習者の多様化に対応する学習の個別化が重視され、言語教育においても教育者の介助を受けながら自律的に学習を進めることの重要性が提唱されている(田中・斉藤(1993)、Pemberton ほか編(1996)など)。言語習得に有効なインターアクションを得る場としても、動機づけを高め、目標言語社会への積極的関与を保証する場としても、教室外での人間関係が重要である。

また、社会教育の視点から、多数派である母語話者と少数派である学習者の接触を捉え直せば、よりよいコミュニティ形成を目指して両者が協力する場としてチュートリアルを位置付けられ、言語教育者がそのような視点に立てば留学生が抱える問題の解決を支援するネットワークの仲介者となることができる。留学生に対するサポート・ネットワークにおいて、日本語教員はいくつかの点で援助者として独自の属性をもっている(松下(1999))。

本稿の調査対象校は日本の大都市近郊の、文科系4学部と大学院1研究科からなる中規模私立大学(学生数は調査当時、約五千余人)である。留学生総数は調査当時で約200人であった。チューターを登録制の学内システムとして運用し始めたのは1997年度からである。1枚の登録用紙で、チューターと、日本語クラスにボランティアで参加するクラスゲスト(ピジター)の両方に登録できる形式になっていた(松下(1998))。(調査の2年後、学生グループによる運営に移管し、教員が側面支援する形に発展した。詳しくは齋藤(2002)、平ほか(2003)、吉田ほか(2003)を参照。)

本稿では、システムの改善に資するため、チューターになった学生のみを対象として、異文化接触や言語学習支援の場における学びの内容、システムの利点と問題点などについて調査した結果を報告する。

本稿が田中(1995)(1996)、村田(1996)などの日本における主要な先行研究と比べて条件的に異なる点は、日本語教員の主導によること、文科系中心の私立大学のシステムであること、無償ボランティアのシステムであることなどで、結果的に、異文化・異言語の理解を含む学習支援が中心で、国立大学に多い渡日直後の生活適応支援や理工系の学習支援などは、相対的に少ない。

2. 調査対象者・調査方法等

調査対象者: 調査校において1998年度秋学期(授業期間: 1998年9月～1999年1月)に留学生対象のボランティア・チューターになった学生34名である。チューター希望者約80名から一定の基準により選任された学生である。調査対象者の属性に関しては調査内容に含まれているので、3. で後述する。

なお、チュートリアルの相手である留学生は、中国・韓国・台湾の学生で大半を占める学部課程の学生と、英語圏の学生を中心とする1年間の留学プログラムに参加している学生が半数ぐらいずつである(延べ人数の出身地別内訳: 中国9、アメリカ5、パキスタン5、オーストラリア4、イギリス4、インド2、台湾2、カナダ1、韓国1、モンゴル1)。

調査方法: 事前に質問紙を渡して回答を用意しておいてもらった上で、電話による半構造的インタビューを実施した。はじめに電話で承諾を得て電話インタビューの日時の約束をしてから質問紙を郵送し、再度、電話してインタビューを行なった。インタビュー時間は一人平均56分(標準偏差17分)である。

質問内容: 田中(1996)、箕浦(1992)などを参考に、独自の内容を加えて作成した。専攻、学年等の属性、日本語教育学関連の履修科目、使用言語と学習言語、海外渡航経験、留学生との接触経験、志望動機、チュートリアルの内容や工夫、よかった点、よくなかった点、システムに対する意見など、約60の小項目からなる。

調査時期: 1999年3月下旬～4月中旬で9割以上(31名)終了、ほか4月下旬・5月初旬・6月初旬が各1名。ただし、回答者の背景調査はチューター登録時(1998年9月～10月)の時点である。

3. 分析観点と結果

3.1 調査対象者の属性および在外経験、海外への関心、留学生交流に対する志向

性別・年齢: すべて20歳～24歳の女子学生である。年齢、性別等による応募の制限はないが、空き時間等の一定の基準にしたがって選任した結果、そのようになったものである。在学生の男女比は3:7程度であるにも関わらずチューター希望者の95%以上が女性である。その理由は不明であるが、女子学生のほうが異文化交流や言語への関心が高いという科目履修の傾向とも一致する。他校でも同様の傾向があるようである。それが調査対象校もしくは日本社会における特定の傾向なのか、世界的な傾向なのかはわからないが、男性に異文化や言語に対する関心が欠ける傾向があるのだとすれば、問題である。また、男性の留学生が同性のチューターを希望するケースもあるが、要望に応じられないケースがある。

所属学科・専攻(表1): 国際学科生25名のうち、13名は比較文化学コース所属もしくは希望の学生で、ほかは地域研究(アジア・アメリカ・日本)コース、国際関係コースの学生である。学部別の在生比から考えると、国際学科、英語英米文学科に著しくかたよった分布である。チュートリアルの対象である留学生の専攻が経済やビジネスであるケースが多いことを考えると、もう少し経済、ビジネスを専攻する学生の応募があるとよいのだが、現状はそうっていない。

所属学年(表2): 日本語教員養成関連科目の履修経験等も選考基準になっているため上級生が多いが、4年生は就職活動等で忙しいため、3年生が一番多い。

副専攻: 日本語教員養成の科目群である「日本語教育学基礎コース」の既修科目数は平均2.1で、履修中の科目数の平均は1.1である。

母語: 全員、日本語である。使用言語による応募の制限はないが、日本語母語話者以外の応募はな

表1 所属学科・専攻

国	際	25
英 語	英 米 文 学	7
経	済	1
ビ	ジネスマネージメント	1

表2 所属学年

1	年 生	3
2	年 生	7
3	年 生	16
4	年 生	8

表3 海外渡航回数

4	回 以 上	22
3	回	4
2	回	5
1	回	2
な	し	1

かった。

第1外国語: 全員、英語で、ある程度使える(「対人関係に応じた言語表現の使い分けが、基本的にできる。通常の速さの会話が聞き取れ、話の内容がほぼ理解できる」もしくはそれ以上)と自覚している学生が26名(76%)である。

第2外国語の学習経験者: 31名(91%)で、三つ以上の外国語の学習経験者14名(41%)であるが、「対人関係に応じた言語表現の使い分けが、基本的にできる。通常の速さの会話が聞き取れ、話の内容がほぼ理解できる」もしくはそれ以上)と自覚している学生は皆無であった。

海外渡航回数(表3): 4回以上渡航している学生が圧倒的に多く、6カ月以上の在外経験がある学生が16名(48%)おり、うち1年以上の留学の経験者は10名(29.4%)いた。これは一般の学生に比べてかなり在外経験が多いグループと言えるであろう。

海外事情への関心: 海外記事(表4)や海外テレビ番組(表5)については、ほとんどの学生が関心があると答えている。

留学生との付き合い: ほぼ全員が何らかの形で関わっている(表6)が、7割強の学生が留学生と学内で知り合う機会が少なく感じており(表7)、ほぼ全員が交流する機会があれば参加したいと思っている(表8)。また、留学生と混合の寮に住むことに関しても、ほぼ全員が肯定的な意見をもって(表9)。

以上の内容を総合すると、今回、調査対象としたチューター学生は、異文化指向性が非常に高く、具体的特徴は以下の3点にまとめられる。

- (1) 海外との関わりの強い学科に属している学生が多く、海外事情に関心が高い。
- (2) 留学生と積極的に関わりをもちたいと望んでいる学生が多い。
- (3) 留学経験・海外在住経験があり、英語がある程度使えると自覚している学生が多い。

これは教員の依頼によるチューターの多い岡田(1999)や理工系の多い村田(1999)などの先行事例とは大きく異なる。

表4 あなたは記事のうち、海外記事をどの程度よく読みますか。

非常に関心をもってよく読む方だ	4
かなり関心をもって読む	17
少し関心がある	13
あまり関心がない	0
全く関心がない	0

表5 テレビ番組のうち、海外番組をどの程度よく見ますか。

非常に関心をもってよく見る方だ	7
かなり関心をもって見る	19
少し関心がある	6
あまり関心がない	1
全く関心がない	0
関心はあるが家にテレビがない	1

表6 あなたは留学生とどのように関わったことがありますか。(複数回答可)

あいさつ、または簡単な日常会話を交わしたことがある	28
同じ講義を受けたことがある	20
一緒に食事をしたり休日を過ごしたりしたことがある	14
勉強のことで相談される	13
生き方、考え方などについて話し合ったことがある	11
同じクラスにいる	6
生活のことで相談される	5
特に関わりはない	4
同じ研究室(ゼミ)にいる	3
同じサークルにいる	2
近所、または同じ下宿(寮)に住んでいる	1

表7 学内で留学生と知り合う機会についてどう感じていますか。

少なすぎると思う	5
少ないと思う	21
ちょうどよい	6
多いと思う	2
多すぎると思う	0

表8 もし学内で留学生と交流する機会があったらどうしますか。

ぜひ参加したい	29
条件によっては参加したい	4
あまり興味がない	1

3.2 学部・院留学生と1年コース留学生のチュートリアル内容および留意点・困難点の違い

チュートリアルの対象となった留学生には、学部・大学院の課程に所属する留学生(以下、「学部・院留学生」と、1年間の留学プログラムに参加する留学生(以下、「1年コース留学生」)がいた。学部・院留学生は、中国・韓国・台湾の学生で9割以上を占め、基本的には一般の日本人学生と共に授業を受けている。日本語能力は、中・上級である。1年コース留学生は、アメリカ・イギリス・インド・オーストラリア・カナダ・パキスタンなど英語圏の学生を中心としており、日本語能力は、ほとんど初・中級(未習者も含む)であった。一部の調査項目では、対象のタイプの違いにより留意点や困難がどう異なるかも分析、考察した。

表9 寮に入ると仮定して、その寮が留学生と日本人と一緒に住むようになっているものだったとしたら、どうしますか。

そのような寮なら喜んで入るし、ぜひ留学生とも同室にしてほしい	21
留学生と同室でも、日本人と同室でもどちらでもいい。そのような寮に入ることを希望する	11
少しは気になるが、とにかく寮に入る	1
日本人と同室ならいいが、留学生と同室なら他の下宿を探す	1
留学生と一緒に住むのは嫌なので他の下宿を探す	0

3.2.1 チュートリアルの頻度・内容

チュートリアルの頻度は週平均で1.18回(標準偏差0.51回)である。通常は週1回だが、ときどき週に2回以上の学生がいるということである。

全体としてみるチュートリアルの内容(表10)は、「日常なおしゃべりをする」が最も多いが、「日本語の授業の補習」、「日本語の語句や表現について説明する」、「発音を直す」などの日本語に関する内容も多い。また、社会文化的側面の学習について見ると「留学生の出身国・地域のことについて話し合う」が「日本の文化・社会や習慣に関する質問に答える」より多く、どちらかという留学生の方が与える側になっている様子が見える。

学部・院留学生と1年コース留学生を、それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較すると以下ようになる。

両者に共通して多いチュートリアル内容は、以下の4点である。

- g : 日常なおしゃべりをする(学部・院: 85% 1年: 76%); 家族のことなど
- a : 日本語の授業の補習(学部・院: 62% 1年: 76%)
- 学部・院留学生: 漢字の読み、語句、読解、漫画、

表10 チュートリアルの内容
(主にどんなことをしましたか) (複数回答可)

g : 日常なおしゃべりをする	30
a : 日本語の授業の補習	27
m : 留学生の出身国・地域のことについて話し合う	27
j : 日本語の語句や表現について説明する	25
i : 発音を直す	23
h : 漢字にふりがなを付けたり、漢字・漢字語の説明をしたりする	19
l : 日本の文化・社会や習慣に関する質問に答える	14
k : 日本語の文法の説明をする	11
e : 日本語の作文やレポートを添削する	10
f : テーマを決めて日本語でディスカッションをする	7
r : 一緒に食事をしたり遊んだりする	7
b : その他の授業の補習	6
n : 国際社会の問題などについて話し合う	6
s : 生活の相談にのる	6
c : 授業とは無関係の勉強	5
d : 日本語の読解の材料を決めていっしょに読む	3
q : 学外での案内・買い物などの付き添い	3
o : 通訳・翻訳	1
p : 学内での案内・各種手続きの手助け	0
t : その他	4

劇の練習、作文・レポート、宿題プリントなど

1年コース留学生: 予復習・テスト対策、漢字の読みかた、ひらがな・漢字の書きかた、語句の意味・用法、文法(助詞・動詞の自他・副詞等)、教科書の音読、短文作成、テーマ作文・レポート、プリント、既修語句を使った会話など

m : 留学生の出身国・地域のことについて話し合う(学部・院 85% 1年: 67%): イギリス人のコミュニケーション・スタイル、イスラム教原理主義、インドのコンピュータ事情、パキスタンの演劇・衣装、気候、建築物、宗教の戒律、家族、シドニーの繁華街、モンゴル人の日本の政治状況に対する理解、中国の気候や建物の作り、進学率と大学生の就職、新疆ウイグル自治区の少数民族、台湾料理や囲碁の話などが話題の例として挙げられた。

j : 日本語の語句や表現について説明する(学部・院: 71% 1年: 54%): ことわざを教えあう、為替の記事の用語など

学部・院留学生に対して多いチュートリアル内容は、以下の2点であった。

e : 日本語の作文やレポートを添削する(学部・院 46% 1年: 14%): レポート・手紙・日記など

b : その他の授業の補習(学部・院: 38% 1年: 5%): 歴史、イスラム文化、情報処理、基礎演習、国際経済など

1年コース留学生に多いチュートリアル内容としては、以下の2点が挙げられる。

i : 発音を直す(学部・院 31% 1年: 81%): ラ行音[l]と[r]、文章の音読など

k : 日本語の文法の説明をする(学部・院 15% 1年: 38%): 助詞・動詞の自他・副詞など

以上を総合すると、どちらのタイプの留学生に対しても日本語サポートと日常生活や文化についての話題が高い割合を占めるが、勉強のサポートに関しては、学部・院留学生のほうが、書くことのサポートが多く、内容も幅広いということが言える。これは事務手続きの手伝いが多く日本語のサポートが40%に満たない村田(1996)とは大きく異なるが、田中(1996)と比べると、手続き・住居探し・通訳等が少ないことを除けば、よく似た数値である。

3.2.2 留意点(気を付けていたこと、心がけていたこと、工夫していたこと)

全体として見る留意点(表11)を見ると、全体的には確認、言い換え、図示などのストラテジー使用を含めた話し方への配慮、相手の希望の確認、使用言語の選択などが上位に来ているが、学部・院留学生と1年コース留学生のあいだには若干の違いが見られる。それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較すると以下ようになる。

両者に共通して多い留意点は以下の3点である。

a : 話し方(学部・院: 62% 1年: 76%): これは、以下の諸点に分類することができる。

* 言語規範: きれいな日本語を話す。正しい日本語を使う。丁寧な日本語を使う。標準語で話す。

* 発話スタイル: できるだけずれた話し方をしない。くだけすぎない。はっきり発音する。助詞等に注意して話す。なるべく自然に話す。

* 語彙選択: 通じない略語を使わない。若者語を使わない。仲間内のことばを使わない。指示語を

多用しない。語尾を丁寧にする。(相手の希望により、)なるべく敬語を使う。相手が授業で習った表現を意識的に使う。

*発話速度: ゆっくり、早口にならないように話す。できるだけ普通の速さで話す。

*その他: 相手が間違えたときに直してあげる。筆談・図示・ジェスチャーのため、近くで話すようにしていた。

h: 自分の言っていることが通じているかどうか確かめながら話す(学部・院: 62% 1年: 62%)

m: 留学生の希望を確認する(学部・院: 54% 1年: 57%)

学部・院留学生と1年コース留学生のそれぞれに対する留意点を項目別に見て、学部・院留学生に対して相対的に多い留意点には、以下の2点がある。

k: 相手の文化や言語に興味を示す(学部・院 54% 1年: 33%)

r: 時間に遅れたり、休んだりしないようにする(学部・院 54% 1年: 43%)

1年コース留学生に対して多い留意点としては、以下の3点が挙げられる。

c: 説明の仕方(学部・院: 38% 1年: 71%)

*わかりやすさへの配慮: 相手にわかることばで説明する。具体例を入れる。区切って説明する。混乱しないようにわかる範囲ではっきり言う。曖昧な言いかたをしない。動詞がわからないときにジェスチャーを使う。

*学習効果への配慮: 一つのことばを多くのちがったことばで説明する。まずわかりそうな日本語で、通じないときは英語で説明する。相手のわかる日本語で話す。英語で言えることも日本語で言う。相手の希望によりくだけたスタイルとかしこまったスタイルを使い分けた。事前になんたときの日本語なのかを言うようにする。

d: 使用言語(なるべく日本語で話す、なるべく留学生の理解できる言語で話すなど)(学部・院 23% 1年: 71%)

g: 相手の言っていることがわからなかったときは一つ一つ確認する(学部・院: 31% 1年: 62%)

以上を総合すると、話し方やチュートリアルの内容について相手に配慮をする点は共通であるが、学部・院留学生に対しては、文化的な面への配慮が他の面を上回るのに対し、1年コース留学生に対

表11 留意点(チュートリアルで気を付けていたこと、心がけていたこと、工夫していたこと)(複数回答可)

a: 話し方	25
h: 自分の言っていることが通じているかどうか確かめながら話す	22
c: 説明の仕方	21
m: 留学生の希望を確認する	20
d: 使用言語 (なるべく日本語で話す、なるべく留学生の理解できる言語で話すなど)	19
g: 相手の言っていることがわからなかったときは一つ一つ確認する	19
r: 時間に遅れたり、休んだりしないようにする	17
f: 留学生が話しているときはそれを妨げない	15
k: 相手の文化や言語に興味を示す	14
o: チューターの時間外でも話しかけて仲良くなろうとする	14
j: 図示ジェスチャーを用いる	10
i: 筆談を用いる	9
q: 約束などの確認をきちんとする	9
e: こちらから積極的に話しかける	8
l: 日本の文化や言語をよく知ってもらおうとする	8
b: 話題	5
n: チューターとして自分ができていることを示す	4
p: 準備をきちんとする	3
s: 必要以上に深く関わらない	2
t: 意見の対立を避ける	0
u: 相手が異性の場合、人目につかないところに行かないなど気をつける	0
v: その他	2

してはわかりやすさや学習効果の面への配慮が目立つ。これは前者のほうが日本語能力が相対的に高いこと、前者の多くが非英語圏の学生であるため、相手の文化や言語に関心を示すことへのニーズが相対的に高まることが原因として考えられる。

3.2.3 困難点(困ったこと、難しかったこと、やりにくかったこと)

全体として見る困難点として、自分の知識や技能の不足をあげる回答が目立った。学部・院留学生と1年コース留学生を、それぞれの選択肢の回答数が、チュートリアル対象の学部・院留学生/1年コース留学生数に占める割合で比較してみたが、両者に共通して多い困難点と学部・院留学生に対して多い困難点は抽出できなかった。

それに対し、1年コース留学生に対して多い選択肢には以下の3点が挙げられた。

j : 日本語の音声・文法・語彙・表現・教授法などに関する自分の知識不足(学部・院 31% 1年: 67%): 語彙、助詞の用法、文末表現など。

c : 自分の外国語運用能力の不足(学部・院 0% 1年: 24%): 語彙不足。元気づける表現など、もつと英語ができればよかった。

b : 自分の日本語能力の不足(学部・院: 15% 1年: 38%): うまく説明できない。漢字の知識があやふやだった。多義的な表現など、どこまで説明するかが難しい。

c.とb.に関して詳しく見ると、英語を使用した学生は9名(26.5%)で、英語圏の学生でも中上級以上では日本語のみでコミュニケーションしている。以上を総合すると、困難点の大半が初中級の学生に対する言語サポートの問題であることがわかる。日本語に関する専門知識の不足をあげる声が多いのは田中(1996)などの多くの先行事例と異なっているが、これは日本語教員の主導のシステムで、学習面でのサポートを主な目的とするシステムだからであろう。

また、約束を守らないという声が8人(23.5%)あるが、これは田中(1995)などの先行事例でも指摘されている。言語運用能力、文化差などいくつかの要因があるように思われるが、何らかの積極的な対策が必要である(3.5 および「補遺」のA参照)。

3.3 期待と効果

チューターへの志望動機(表13)とチューターをやっ

表12 困難点(困ったこと、難しかったこと、やりにくかったこと)(複数回答可)

j : 日本語の音声・文法・語彙・表現・教授法などに関する自分の知識不足	17
b : 自分の日本語運用能力の不足	10
n : 約束を守ってくれない(時間に遅れる、無断・突然のキャンセルなど)	8
i : 日本の文化や社会に関する自分の知識不足	7
f : 留学生の出身国・地域に関する知識の不足	6
a : 留学生の日本語運用能力の不足	5
c : 自分の外国語運用能力の不足	4
e : 自分の総合的なコミュニケーション能力の不足	4
g : 留学生の専門に関する自分の知識不足	4
d : 留学生の総合的なコミュニケーション能力の不足	2
q : 異性であるためよくない点がある	2
k : 文化的な価値観や習慣の違い	1
l : 過度な依存や難しい依頼をされる	1
o : 何をすればいいのかわからない	1
p : 年齢が離れていてよくない点がある	1
s : 性格が合わない	1
t : 特になし	1
h : 留学生の希望する(留学生の専門以外の)補習分野に関する知識不足	0
m : あてにされない・信用されない	0
r : 社会経験・生活環境や興味・関心に自分と共通点が少ない	0
u : その他	5

てよかったこと(表14)の質問項目は内容的に対応するように作成した。期待と効果の2グループで対応する項目の回答数の割合を、母比率の差の検定で調べたところ(石村1993、p.157を参照し、イエーツの補正を施して検定)、「期待(志望動機)以上の効果がみられたもの」2項目と、「期待ほどの効果がなかったもの」5項目が得られた。その他の項目には期待と効果に有意差がなかったが、双方ともに高い数値を示している項目は「期待通りの効果がみられたもの」と分類できる。

表13 チューターへの志望動機(複数回答可)

a : 留学生(外国人)と友達になりたい・交流したいから	31
b : 留学生(外国人)の文化、社会などに興味があるから	24
g : 留学生(外国人)の手伝いをしたい・力になりたいから	24
o : 自分の見聞を広げたいから	22
c : 留学生の言語(外国語)を学びたい・教わりたい・会話の練習がしたいから	19
s : おもしろそうだから	17
n : 新しい友達がほしいから	15
p : 人の役に立つことがしたい(ボランティアがしたい)から	15
e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再認識したいから	14
d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再認識したいから	14
k : 日本語を留学生(外国人)に使えるようになってほしいから	12
h : 自分の留学体験・海外在住体験が役に立つと思うから	12
l : 将来、日本や日本語を紹介したり教えたりする職業につきたいので、その練習・勉強になると思うから	12
f : 自分が以前に海外留学して学んだ知識や言語を忘れないようにし、さらに伸ばしたいから	11
j : 日本文化・日本社会を留学生(外国人)に知ってほしいから	10
q : 教えることが好きだから	9
r : 以前にやったことがあり、よかったから	5
m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深めるため	4
t : 空き時間を有効に使いたいから	4
u : 友人がやっているから	2
i : 自分がこれから留学する(したい)ので、そのために役立つと思うから	1
v : 先生にすすめられたから	0
w : その他(留学中にチュートリアルを受けて楽しかったから、留学中にチュートリアルを受けていて助かったから、自分が異文化の中で受けてきたサポートの恩返しをしたい、経済学科のチューターが少ないので)	4

表14 よかった点(複数回答可)

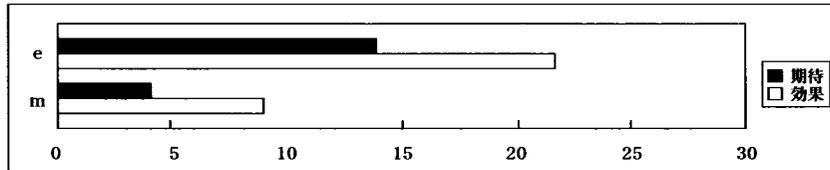
a : 留学生(外国人)と友達になれた・交流できた	27
b : 留学生(外国人)の文化、社会などの話がきけた	24
e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再確認できた	22
g : 留学生(外国人)の手伝いができた・力になれた	21
o : 自分の見聞を広げられた	17
s : おもしろかった	17
n : 新しい友達ができた	17
c : 留学生の言語(外国語)を学べた・教わった・会話の練習ができた	14
p : 人の役に立つことができた(ボランティアができた)	14
d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再確認できた	14
w : わかりやすい日本語で話す練習になった	13
q : 教えることが好きで、それができた	10
l : 将来、日本や日本語を紹介したり教えたりする職業につきたいが、その練習・勉強になった	9
m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深められた	9
k : 日本語を留学生(外国人)によりうまく使えるようになってもらった	8
h : 自分の留学体験・海外在住体験が役に立った	5
v : 忍耐・寛容・思いやりなど人格的に成長できた	5
j : 日本文化・日本社会を留学生(外国人)により多く知ってもらえた	4
t : 空き時間を有効に使えた	4
u : 食事・パーティー・レジャーなどの楽しい体験ができた	4
r : 以前にやったことがあり、それと同様によかった	3
i : 自分のこれからの留学のために役立った	2
f : 自分が以前に外国留学して学んだ知識や言語を忘れないようにできた、さらに伸ばせた	1
x : その他	3

(チューター本人の)期待以上の効果が得られたのは、以下の2項目である(図1)。

e : 留学生(外国人)と接することで日本語について再認識できた

m : 副専攻「日本語教育学基礎コース」の科目の理解を深められた

図1 期待以上の効果が得られた項目



この2項目に関する主な具体的回答は以下の通りである。

e(日本語(母語)の再認識): 助詞、オノマトペ、ものの数え方、ノダ・ノデスの使い方、接続詞、漢字など。若者語の「チョーおもしろい」。「覚えられない」と「覚えきれない」などの類義表現の違い。「いっぱい」と「たくさん」など、口語と文語のちがひ。説明や教えることの難しさに気づいた。間違えやすいところがあった。話す時に普通体か丁寧体か迷い、敬語について再認識した。卒論テーマへの理解が深まった。ふだん何気なく使っている日本語を学習者は深く考えていることがわかった。語句の説明のときに漢字語の類義語に置き換えたらわかってくれた。「一期一会」など日本的なきれいなことばに気づいた、日本人は難しい漢字をたくさん使っているんだなあとと思った。

m(日本語教員養成科目との関連): 学んだ知識が役に立った。現代日本語学の授業で聞いた誤用が実際にあった。不明点を現代日本語学の先生に質問した。

次に、(チューター本人の)期待通りの効果が得られた項目として、以下の7項目が挙げられる(図2)。これらは期待と効果の間に有意差がなかった項目のうち、効果から見た上位7項目である。

b : 留学生(外国)の文化、社会などの話が聞けた

g : 留学生(外国人)の手伝いができた・力になれた

n : 新しい友達ができる

o : 自分の見聞を広げられた

s : おもしろかった

d : 留学生(外国人)と接することで日本の文化や社会について再認識できた

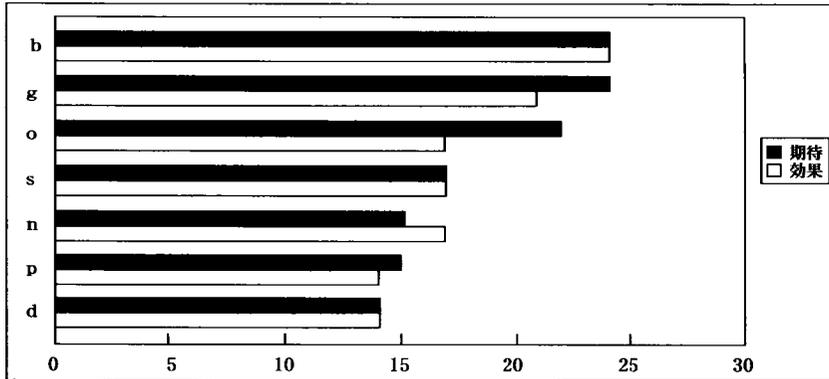
p : 人の役に立つことができた(ボランティアができた)

具体的には以下のようなコメントがあった。

b, o(他者の社会文化知識の学習): インドの結婚式でサリーを3度かえること、宗教による習慣・タブーなど、パキスタンのこと。中国の一人っ子政策のこと、経済的に余裕のある人しか留学できないこと、中国人は日本人ほど遠慮しないこと。中国の結婚の習慣のちがひ、中国の町の呼び方、中国の裏情報や知られていない観光地。宗教や演劇のこと。

g(援助への効力感): 留学生ががんばっていたので、何とかしてあげたい、日本語能力試験に受かってほしいという気持ちになれた(表15も参照)。

図2 期待通りの効果が得られた項目



n, s(交流への効力感): おしゃべりが好きな相手だった
 d(自己の所属する社会文化の再認識): 待遇表現、元号、日本食の食材、内閣制度の大統領制との違い。リストラ・不況などに対する受け止めかたのちがひ。自転車で同じ方向によけた場合に「すみません」というが、韓国ではそう言わない。日本には行事が多い。日本の会社、住宅事情、教育レベル、ちゃらちゃらした格好の女の子のこと。日本の学生は自分の国に無関心。

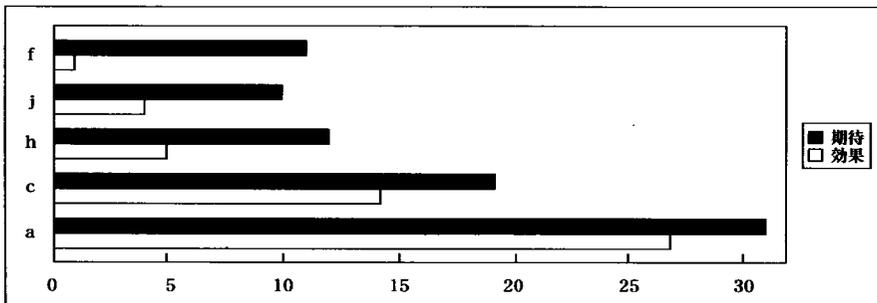
表15 留学生の期待にこたえられたと思うか

a. 普通以上にこたえられたと思う	4
b. 普通程度にはこたえられたと思う	16
c. 少しはこたえられたが、普通以下だったと思う	9
d. 全くこたえられなかったと思う	0
e. わからない	5

(チューター本人の)期待ほどの効果がなかったのは以下の5項目である。

- f: 自分が以前に外国留学して学んだ知識や言語を忘れないようにできなかった、伸ばせなかった
- j: 日本文化・日本社会を留学生(外国人)にあまり知ってもらえなかった
- h: 自分の留学体験・海外在住体験が役に立たなかった
- c: 留学生の言語(外国語)を学べなかった・教われなかった・会話の練習ができなかった
- a: 留学生(外国人)と友達になれた・交流できた

図3 期待ほどの効果が見られなかった項目



これらは効果が期待に比べて有意に少なかった項目であるが、aやcは依然として高い割合で効果があった項目であり、効果がなかったわけではないことには注意が必要である。

効果がなかったという消極的的回答にはコメントがほとんどなかったが、以下のような積極的コメントもあった。

f(留学時の言語・知識の維持): 相手の留学生とは日本語が多かったが、相手の友人の英語に触れられた。

h(異文化経験の活用): ホームステイ経験が役立った。外国語学習の苦勞、友人の助けのありがたみ、留学生が「友人になるのが難しい」と言っていたことに共感した。友人づくりが大変でつらかった自分の留学体験があったので、相手の立場で話せた。留学生の日本語の学び方がよく理解できたし、自分自身の学習方法(普段から目標言語で話すなど)について話したこともあった。

c(相手の言語の学習): 「…は英語で何?」と日本語や英語で質問できた。英語、中国語、ウルドゥー語、ヒンディー語などを教えてもらった。

a(交友): 会えば普通に話せる。年賀状のやりとりをした。友達とまでは言えないが、交流はできた。

この項目は27名(79.4%)が効果としてあげているが、項目n「新しい友達ができた」17名(50.0%)と比べると10名(29.4%)少ない。項目aには「友達になれた」に加えて「交流できた」を加えてあるので、この差の10名(29.4%)は「交流はできたが友達にはなれなかった」と解釈することができる。さらに7名(20.5%)は友達にもなれず交流もできなかった、ということになる。

以上を総合すると、田中(1996)、村田(1996)同様、他者理解、援助や交流への効力感はあるが、それに加えて、日本語に対する気づきや、日本語教員養成へのプラスの効果が、日本語教員主導のシステムの特徴として指摘できる。一方、日本語教員の主導のため、日本語を中心とする支援が一義的的となつているため、留学生の言語について学ぶことや、留学で学んだ知識や言語を活かし、忘れないようにするといった目的は期待はずれに終わることが多いと言える。(この点は調査後、双方向チュートリアル・システムに転換し、改善が図られている。詳細は齋藤(2002)参照。)

なお、留学中に学習の個別サポートを受けた学生が、今度は自分がサポートをする立場になろうという動機が一部に見られる(表13の末尾「w. その他」)ことは特記すべきことである。毎学期、このような学生が見られるが、留学によってマイノリティの立場が理解できるようになるということであろうと思う。

3.4 チューター経験者の口コミと人間関係のネットワーク化

チューター制度を知ったきっかけ(表16)によれば、半数強が「掲示板」(19名、56%)であるが、次いで多いのは「留学生以外の学生から」(10名、29%)という答えで、そのほとんどがチューター経験者からの口コミである。ここからは留学生を含む人間関係のネットワークが、教員を中心とする放射状ではなく、網の目状の学生間ネットワークになっているこ

表16 チューター制度についてどのように知りましたか。(複数回答可)

掲示板で	19
留学生以外の学生から	10
教員から授業で	6
国際交流センターで	3
留学生から	2
その他	2
教員から個人的に	0

とが推察される。口コミで事前に仕入れた情報(表17)をみると、必ずしも楽しい、おもしろいといったことばかりでなく、それなりに難しい点もあることを聞いてきていることが伺われるが、それでも友達が増える、勉強になるといった話を聞いて応募してくるようである。

表17 (表16で「留学生以外の学生から」と回答した人が)チュートリアルについて事前に聞いていたこと

- ・文法の説明が難しい。おもしろい。時間にルーズな留学生もいる。
- ・頻度や内容について。マン・ツー・マン形式で、補習やおしゃべりをする。おもしろそうだった。
- ・留学生に教えることで友達も増える。
- ・日本語を教える、留学生は話せるから英語は不要で友達みたいな感じで話せる、友達が増える、チューターは複数いるので背負い込むことはない。
- ・留学生からは日本語を教えてもらって仲良くなったと聞いた。チューター経験者からは申し込み方法や履修しておくべき教科、テキストを使って行なったチュートリアルの内容など。
- ・アメリカに短期留学したときの language partner のシステムと同じものがあるらしい。
- ・視野が広がる、日本を別角度から見られる、日本語でコミュニケーションするのは難しい、相手の文化・考え方もある程度知らないといけない、高度な知識・専門的なことを聞かれると難しい。
- ・空き時間を利用し、楽しい。内容は補習とおしゃべり。
- ・留学生に教えるボランティアで、おもしろかった。英語を使ってしまう。簡単な日本語に直すのがむずかしい。

また、チュートリアル終了後の予定を尋ねた結果では、おおよそ3分の1ぐらいのチューターが、何らかの形で今後も相手の留学生と関わるとの回答をした(表18)。学期により時間割が変わることや帰国・卒業する学生もいることを考えれば、半分ぐらいの学生が何らかの形で関係を続けてもよいと考えたといえるであろう。

表18 今回チューターを担当した留学生と、来学期もチュートリアルをする予定や、付き合いを続ける予定はありますか。

a. チューターを続けることになっていて、日時も決めてある	0
b. チューターを続けることになっていて、連絡を取る約束をしたが、日時は決まっていない	3
c. チューターを続けるかどうかは決めていないが、連絡を取る約束をした	3
d. 必要があれば、留学生から連絡がくることになっている	5
e. チューターを続けるかどうか決めておらず、何の約束もしていない	8
f. チューターはしないが、今後友達として連絡をとりあう約束をした	6
g. チューターを続ける予定はない(できない)ので、何の約束もしていない	7
h. その他(他の人を紹介する等)	6

「(今回担当した留学生以外に) これからも留学生のチューターをやりたいと思いますか。」という質問に対しても、31名(91.2%)が「はい」と答え、「その他」(相手にやる気があれば、友達になれば、条件次第)が3名で、「いいえ」は一人もいない。チュートリアル終了後にも学内の人間関係のネットワークとして、ある程度機能しているとみてよいであろう。

3.5 チュートリアルの変更や中止について

チュートリアルの変更を経験したのは9名(26%)で、中止を経験したのは24名(71%)である。そ

のうち8名(24%)が留学生からの事前連絡なしの中止を経験しており、チューター自身の都合で中止するときに事前連絡できなかったと答えた調査対象者も2名(6%)いた。急な風邪、電話がないなどの理由で連絡がつかなかったケースもあるが、1学期間に数回も事前連絡なしの中止があるなど、約束を守ることにに対する個人差・文化差が原因と思われるケースも散見される。双方の勘違いや連絡時の誤解と思われるケースも、6名(18%)が経験している。

以前よりこのようなケースは少なからず報告されており、調査対象校においても事前連絡や会えなかった場合の連絡に関する注意が説明会等で行なわれている。アポイントメントの失敗はチュートリアル・システムの問題点であり、事前の対策が必要である。失敗の原因については、チューター側からだけでなく、留学生の側からの調査も必要である。

3.6 チューター経験者によるシステム改善の主な提言

チューター経験者によるシステムの改善に関する提言(自由回答)は、「チュートリアルへの支援、システムの整備」と「ネットワーク化の要望」の2点に大別できる。

(チュートリアルへの支援、システムの整備)

- ・チュートリアル初期の援助・アドバイス
- ・マニュアルの整備(質問集・意見集・話し方・質問への対処法など)
- ・連絡やスケジュール調整への援助
- ・目標、分担範囲の明確化
(ネットワーク化の要望)
- ・留学生とチューターの交流機会の提供(パーティーなど)
- ・チューター間のネットワーク構築(ミーティングや勉強会・見学の実施、メーリング・リスト、交換ノート、気楽な昼の集まりなど)
- ・留学生の履修科目の担当教員との連携、日本語教員との連携
- ・グループ・チュートリアル

これらの提言のいくつかは、海外の大学に留学した経験のあるチューター学生が留学中に受けたサポートと比較して語ったものが含まれている。例えば、留学生の履修科目の担当教員との連携については、一部の米国の大学などでは実現しているが日本ではほとんど普及しておらず、今後、更なる研究と改善を要する。

4. まとめと今後の課題

以上をまとめると、全般にチュートリアルに対する効力感が高いが、中上級以上の日本語力を持つ学部・院留学生対象のチュートリアルのほうが幅広い交流が行なわれている一方、日本語初中級レベルの学生を対象とするチュートリアルでは日本語サポートの問題が多く、しかしそれだけに予想外の気づきや学びも多い、と言える。また先行研究と異なり、非英語圏から日本語初級レベルの学生が来ることがなく、英語圏を中心とする1年コースの学生はホームステイや職員による生活面での

サポートがあるため、その面でのチューターの負担が少ない。その分だけ日本語面での問題も気付きも多い結果となっている。日本語教員養成課程の学習面での効果も自覚されている。

今後の課題であるが、まず、本稿はチューター学生のみが対象の調査結果なので、留学生対象の調査による効果や問題点の検証が必要である。

次に、チュートリアル・システムに関する具体的な改善点であるが、前節における経験者の提言は、いずれも傾聴に値する。そして、これらを統合して考えるならば、チュートリアルや自習で使用可能なりソースを集中させた学習センターの整備も日本の大学における大きな課題であろう。留学生の多い欧米の大学の多くが第二言語学習のセンターを有しているのに比べ、日本においては、学習センターという発想そのものが十分に普及していない。支援・調整の機関としても、ネットワークの結節点としても利用できるような学習センターの整備を進め、チュートリアル・システムの構築もそこで行なうようにすれば、効率的な支援が可能になると思われる。マニュアルの整備、学生・教職員を含めた更なるネットワーク化の推進といった課題も、特定の教職員がボランティア的に片手間に行なう仕事ではなく、学習をサポートする専門のスタッフが行なうべき重要な仕事として位置づけられねばならない。それにはまず、学習者の自律など、望ましい学習のあり方に関する教職員間、および教職員学生間の共通理解が必要であるように思われる。

謝 辞

本調査にあたり、チューターを担当してインタビューを受けてくださった方に、ご報告が遅くなったことをお詫び申し上げますとともに、心よりお礼申し上げます。

* 本稿の内容に関するご質問等は松下達彦(tatsu@obirin.ac.jp)までお願い致します。

引用文献 * 出版年次順

- 碓氷 尊(1982)「相互適応の実態: 外国人留学生・指導教官およびチューター学生に対するアンケート調査の結果から」『筑波フォーラム』18
- 権藤与志夫・白土 悟(1988)「外国人留学生の学習と生活に関する諸問題 -九州地区国・公・私立大学における質問紙調査報告-」『比較教育文化研究施設紀要』39、九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設
- 岡崎敏雄(1990)「教室外の話者を組み込んだ談話指導-チューター指導の体系的追及」『第2言語としての日本語の教授学習過程の研究』(平成元年度科学研究費補助金〔一般研究(B)〕研究成果報告書、研究代表者: 細田和雅)
- 箕浦康子(1992)「日本人学生と留学生: 予備調査 -岡山大学における異文化接触の実態とその促進要因-」『岡山大学文学部紀要』18
- 石村貞大(1993)『すぐわかる統計解析』東京図書
- 田中 望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実践-学習支援システムの開発-』大修館書店
- 田中共子(1995)「日本人チューター学生の異文化接触体験: ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己の成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』6
- 田中共子(1996)「日本人チューター学生の異文化接触体験(2): その役割と異文化交流に関する質問紙調査」

『広島大学留学生センター紀要』7

- 田中共子・高井次郎・神山 貴・藤原武弘(1996)「日本人学生の学生チューターとしての異文化接触体験 —ソーシャル・スキルの実施とソーシャル・サポートの授受を中心に—」『異文化間教育学会第17回大会発表抄録』および大会配付資料
- Pemberton R. ほか編(1996) *Taking Control: Autonomy in Language Teaching*, Hong Kong University Press
- 村田雅之(1996)「チューターの援助と仕事観」『飯山論叢』(東京工芸大学女子短期大学部紀要)13-2
- 瀬口郁子・塩川雅美・田中圭子・森野美紀(1997)「チューター制度に関する実態と教育的効果に関する研究」『異文化間教育学会第18回大会発表抄録』および大会配付資料
- 田中共子(1997)「日本人学生チューターの異文化接触体験 —質問紙調査より—」異文化間教育学会第18回大会(龍谷大学)発表抄録および配付資料
- 大島まな(1998)「市民ボランティア・チューターの活動プログラムと学習成果に関する研究 —留学生の日本語・日本文化理解援助の一方法として—」『異文化間教育学会第19回大会発表抄録』および大会配付資料
- 大島まな・永渕美法(1998)「大学における市民ボランティアの意識と特性に関する研究(その1)—生涯学習時代の大学と地域の連携—」『九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』第3号
- 松下達彦(1998)「日本語教員主導型ボランティア・チューター/クラス・ゲスト統合運用システム」『平成10年度 日本語教育学会秋季大会 予稿集』日本語教育学会
- 岡田安代(1999)「留学生教育における「教授者ネットワーク」の検討 —愛知教育大学におけるチューター活動の実態調査より—」『愛知教育大学研究報告』48(教育科学編)
- 瀬口郁子・田中圭子(1999)「チューター制度の運用に対する提言 —満足度と教育的効果の観点からの考察—」『神戸大学留学生センター紀要』6
- 松下達彦(1999)「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育 —教室外環境と教室内環境の融合を目指して—」文部省留学生課監修、日本国際教育協会編『留学交流』11-12、ぎょうせい
- 三牧陽子・竹内康恵・西口光一・難波康治・浜田麻里(1999)「日本語学習者と日本人協力者による相互活動 —「日本語パートナー」導入—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』3
- 桜田千采・島 弘子・松下(八重沢)美知子(2000)「チューターの異文化理解とチューター制度について —チューターからの報告を中心とした実態調査より—」『金沢大学留学生センター紀要』3
- 金田智子(2001)「学生ボランティア制度の現状と諸課題 —「広島大学国際交流ボランティア」発足から2年半を経て—」『広島大学留学生センター紀要』11
- 松本久美子(2001)「会話パートナープログラム —留学生と日本人学生の相互理解に向けて—」『広島大学留学生センター紀要』11
- 齋藤伸子(2002)「学生主導のチューター制度 —双方向チューターの試み—」『JALT日本語教育論集』6、全国語学教育学会日本語教育研究部会
- 山崎けい子(2002)「チューター活動における日本人学生の意識変化」『富山大学人文学部紀要』36
- 平 学人・林 京子・佐藤江美(2003)「学生主導による国際交流支援活動」『日本語教育方法研究会誌』10-1、日本語教育方法研究会
- 吉川裕子(2003)「留学生のためのチューター制度と活動報告 2001年度(初年度)」『久留米大学外国語教育研究所紀要』10
- 吉田多恵・小口朋子・野辺地寿衣・吉池沙夜香(2003)「双方向学習に基づく活動の実践と効果」『日本語教育方法研究会誌』10-1、日本語教育方法研究会

補遺 調査結果補足(本文中に記さなかったもの)

以下に、主に非構造的な部分(自由回答部分)のうち、本文中に記さなかった部分を記すが、「特になし」という回答の場合は記述から除外した。また、記述は回答者の表現そのままではなく、適宜、稿者の表現でまとめてある。

A. 約束の変更・キャンセルの回数・理由・状況(下記の回答以外は変更やキャンセルなし)

- ・初めは週2回だったが、10月ぐらいからプライベートに付き合い始めて頻繁になった。
- ・初めの1回は勘違いで会えなかった。その後も事前連絡なしで数回キャンセル。初めの約束は反故にされ、1回1回次の約束をするようになった。まわりは怒っていたが、自分は許していた。
- ・キャンセル4回(留学生の都合で3回(当日会ってレポート・買い物等で忙しいと言われて)、自分の都合で1回(事前に連絡した)、遅刻も自分が1回、留学生が1回。
- ・キャンセル1回(自分の風邪、連絡できなかった。)
- ・キャンセル1回(自分の親戚に不幸があったため)
- ・キャンセル2回(自分の風邪、自分の場所の勘違い)
- ・変更数回(留学生の都合や自分のアルバイトの都合で)、初めは週2回だったが、2カ月目(日本語能力試験の直前)から週1回になった。
- ・キャンセル1回(お互いの勘違いで会えなかった。その後共通の友人を通じて連絡して次の日にばったり会った。)
- ・キャンセル4回、そのうち、事前連絡なし3回。
- ・キャンセル2回(自分の就職活動、風邪で。会って次週の中止を伝えたがうまく伝わっていなかったことがあった。後で留学生から電話があった。そのほかはEメールで連絡した。)
- ・変更1回(自分の都合で、キャンセル(留学生に遅刻が多かった)
- ・キャンセル4回、事前連絡なし。
- ・変更1回(自分の都合で)
- ・初めは水曜3限だったが、留学生の授業の都合で2限に変更、以後変更なし。キャンセル1回(自分の風邪)。
- ・変更2~3回(留学生の都合や自分の都合で、キャンセル1回(前週に変更したが、双方が勘違いしていたため。後で自分から電話した。)
- ・キャンセル1回(留学生の一時帰国の都合で。事前連絡あり。)
- ・キャンセル1回(留学生が風邪で。そのときは連絡がつかなかった。)
- ・初めは週1回。留学生が忙しいので会う直前にこちらから電話していた。キャンセル3回ぐらい、事前連絡なし。初めの1回は忘れられた。電話で行けると言っていたのに来なかったこともあった。
- ・時間帯を2回目から変更した。初めは2人对1人だったのを留学生の希望で1人对1人に変更した。キャンセル1回(留学生の体調不良)。
- ・変更1回(留学生の都合で、キャンセル1回(行き違ったが、携帯電話で連絡がついた。)
- ・変更1回(前の時間の授業が延長したので電話した。)
- ・キャンセル1回(自分の卒論提出前に。事前連絡して。)
- ・キャンセル4回ぐらい。そのうち、事前連絡なし2~3回ぐらい。
- ・キャンセル数回(自分が長期に風邪をひいたので。e-mailで事前連絡できた。)
- ・キャンセル1回(留学生の風邪。事前連絡なく、次週に風邪と聞いた。)
- ・キャンセル6回(体調不良等、留学生の都合で4回、自分の都合で2回。そのうち、事前連絡なし3回、自分が連絡できなかったことも1回。来なかったときは手紙をメールボックスに入れた。)
- ・キャンセル4~5回(1回目は事前連絡なし。会えたときにも忙しいからということで。自分の急用、留学生

の風邪。留学生が電話を持っていなかったで、次回会えるまで連絡がつかなかった。)

- ・キャンセル3回(時間の勘違い1回、留学生がレポートで忙しくて連絡なく2回、30分待って学内で探したり学内で会ったときに声をかけたりした)、ほか留学生の遅刻や自分の遅刻が数回
- ・キャンセル1回(留学生の都合で、当日朝会ったときにキャンセル。) 11月に留学生のほうの方が忙しくなってチュートリアル打ち切り。

B. チュートリアル以外の時間に相手にあった経験、理由・状況

- ・自分の地元のスキー教室の近くで会った。そのほか学内で数回ぼったり会って立ち話。
- ・学内でぼったり会ったこと数回。挨拶と立ち話。
- ・たくさんあった。プライベートに付き合っていたので。
- ・1回たまたま校内であったときに留学生の試験前だったので2時間ぐらい見てあげた。
- ・学内でぼったり会ったことが1~2回。「日本の政治」という同じ科目を履修していて、自由党本部に現地集合で行くときに一緒にいった。
- ・学内でぼったり会ったことが週3回程度。挨拶と立ち話。コンピュータ室、教務課、徳望館など。
- ・学内でぼったり会ったこと4~5回。立ち話程度。
- ・学内でぼったり会ったことが週1回以上。
- ・当初決めたのは週1回だが、会うたびに相談して漢字の勉強のためなどに臨時で増やして平均週2回程度になった。あとは自分で誘って、学園祭の準備、異文化間コミュニケーションのゼミのパーティー、大学主催のインターナショナル・ツアーなどにいっしょに参加した。
- ・コンピュータ・ルームなど学内でよくぼったり会って立ち話した。チュートリアルの後よく延長しておしゃべりした。食事も1回いっしょにした。
- ・留学生自身の主催した留学生宅でのお別れ会に呼ばれた。前学期から知り合いで、ほとんど毎日、学内で顔を合わせた。平均週1回ぐらい一緒に弁当を食べた。
- ・学内でぼったり会うのが週3~4回。挨拶と立ち話。そのほかに1回TOEFLの補習をしてくれた。
- ・学内でぼったり会ったこと3回ぐらい、立ち話程度。昼食をいっしょにしたこと2回ぐらい。
- ・学内のコンピュータ・ルームなどでよく顔を見かけた。挨拶程度。
- ・チュートリアルが5限だったので、1カ月目ぐらいからはチュートリアル後ほとんど毎回おしゃべり。留学生の家に泊まりに行った。ぼったり会って立ち話も時々。
- ・学内でぼったり会うのが週1回程度。挨拶と立ち話。毎週、チュートリアルの後に昼食、留学生2人とチューター仲間4人で。
- ・学内でぼったり会ったこと5回ぐらい。立ち話(最長15分程度)。
- ・1回、留学生からお土産をもらうときに、留学生から連絡を受けて。
- ・チュートリアルの後にだいたい毎回一緒に食事していた。レポートや試験のために3回ぐらい通常のチュートリアルとは別に会った。
- ・いつもは金曜4限だったが、忙しそうだったので、2回ぐらい昼休みに約束して会った。
- ・ゼミ(異文化間コミュニケーション)で留学生を呼んで2回パーティーをした。
- ・留学生の依頼で情報処理の宿題のために1回。学内でぼったり会ったこと10回ぐらい。コンピュータ・ルーム、掲示板、スクール・バス乗り場など。帰宅時にいっしょになって食事をいっしょにしたこと2回ぐらい。電話数回。
- ・いっしょに料理を作ったり食事したりしたことが3~4回。学内でぼったり会ったのが1~2回、挨拶程度。
- ・1回ぐらいあったかも?
- ・学内(図書館など)でぼったり会ったことが数回、挨拶と立ち話。

- ・学内でばったり会ったことが週2回ぐらい。
- ・学内でばったり会ったこと5回ぐらい。挨拶と立ち話。
- ・学内でばったり会ったこと数回、挨拶程度。そのほか大学情報集めのホームページ検索のために、コンピュータ・ルームに1回一緒に行った。
- ・学内でばったり会ったこと数回。コンピュータ・ルームなどで、立ち話5分ぐらい。
- ・学内でばったり会ったことが週2回ぐらい。春休みに昼食をいっしょにしたことが1回。
- ・学内でばったり会ったことが3回ぐらい、立ち話程度。

C. 途中で人数・形式が変わった経験(臨時の場合も含む)、理由・状況

- ・2回、自分の友人一人が希望して参加。
- ・1回、もう一人のチューターの友人一人が希望して参加。
- ・当初2~3回、複数の自分の友人が参加した。
- ・1回、他の留学生のチューターといっしょになった。
- ・1回、留学生の友人がたまたま途中から加わった。
- ・自分が2回友人を連れていった。それぞれ違う友人で、いずれも友人の希望で。話題が広がってよかった。
- ・学内サークルの活動ではたくさんのメンバーと一緒にだった。学園祭の準備5~6回、ウェルカム・パーティー、さよならパーティー、ディズニーランド行き各1回など。
- ・1回、自分の友人がたまたま横にいたことがあったが、口を挟まれて混乱したので以後1対1にした。
- ・自分の友人一人が偶然来て参加したことが2~3回。留学生の友人が来て参加したことが2~3回。場所は太平館の1階ロビー。
- ・2回(自分の友人二人が通りがかりで加わったこと1回、留学生の友人が通りがかりで加わったこと1回)
- ・留学生が1回一人友人を連れてきた。自分も1回友人を連れてきた。そのようなときは世間話になりやすい。
- ・アジアのことで論文を書きたいという友人が希望して、3人対1人が1回、2人対1人が2~3回。チューターが複数になると文化のちがいが増え、議論が増える。
- ・ほぼ毎回。チュートリアル前の時間が日本語教育のゼミだったので、毎回ゼミ仲間3人が同じ教室にいて、もう一組のチュートリアルも同じ教室だった。
- ・自分の友人が留学生に聞きたいことがあり希望して1回参加した。留学生の授業にいっしょに出て自分の友人を紹介した。通り掛かりの友人が挨拶した。
- ・1回、たまたま自分の友人が参加した。
- ・2回(3人対1人のはずだったが、最初の1回が2人対1人で、あとは1人対1人)
- ・1回、料理をいっしょにしたときに友人一人が参加した。
- ・途中から自分の友人一人が毎回、参加するようになった。留学生の他大学の友人一人が参加したことが1回あった。
- ・初めは3人対1人のはずだったが、すぐに1人対1人になった。そのほか自分の友人が加わったこと1~2回。
- ・自分が1回友人を連れてきた。
- ・1回、たまたま自分の友人が参加した。

D. チュートリアルの時間外に準備をした経験

- ・特にないが、日本語教授法の本を読もうと思った。
- ・2回、辞書を引いた。
- ・話題を考えていた。留学生に紹介された映画を見て、説明されたあらすじと比べてみた。
- ・単語(例:「栄養」)を2~3回に1回(計3~4回?)国語事典・英和辞典・和英辞典を調べた。

- ・3~4回、聞かれた語の説明のため、帰宅後に辞書を引いたり、人に聞いたりした。途中から留学生が辞書を使うようになった。
- ・1回、「…なんだ」の「んだ」の用法を調べた。
- ・新聞記事や雑誌を毎回の準備のために探した。辞典を引く語が毎回2語ぐらいあった。会社の組織や製造・流通について父親に尋ねた。
- ・能力試験の前には慣用句の単語帳を作ってあげた。相模原市国際交流ラウンジでテキストを借りた。不明の点を先生に訪ねて解決した。敬語など、辞典や参考書を調べた。
- ・なし(留学生が辞書・参考書をたくさん持って来ていたので、すべてその場で解決した。
- ・動詞の自他の使い分けについて、現代日本語学Ⅱ(文法)に出ている友人に尋ねた。
- ・漢字を帰宅後に辞書で確認したことがあった。
- ・辞書を引いたことがあったかもしれないがよく覚えていない
- ・雑誌『歴史街道』を留学生に勧めたので、ほぼ毎週、人物の顔や建造物を示すために準備したり、きかれた用語を調べたりした。英語のプリントを準備して予習した。あわせて毎週30分ぐらい準備した。
- ・助詞の用法など、家で辞書を引いたり、人に聞いたりした。留学生の情報処理の課題を自分で家でやってみたりした。
- ・1回、新聞の漢字の読み方を自宅で辞書で調べた。
- ・課題の新聞記事集めの手伝いをした。国際経済の授業と一緒に出了。
- ・経済用語についてきかれて、帰宅後に経済新聞などで調べたことが2回。
- ・「覚えられない」「覚えきれない」の違いを先生に尋ねた。辞書を引いた。天ぷらをいっしょに作るまえに自宅で一度作ってみた。
- ・日本語の教材を探した。
- ・日本の習慣など、独り善がりにならないように、他の人に尋ねるようにしていた。
- ・単語を辞書で調べたことが数回。
- ・1回、文法の本を図書館で借りてさらっと読んだ。日本語教師になるための本を読んだ。
- ・文法の活用の中で、現代日本語学Ⅱ(文法)のテキストを見た。

E. 留学生の方から積極的にしてくれたこと

- ・留学生が自分の母語を教えてくれた
- ・留学生のパーティーに誘ってくれた。遊んだ、デートした。プレゼントをくれた。ディベート技術という科目の宿題の手伝いをしてくれた。
- ・パーティーに誘ってくれたが、口だけという感じがした。
- ・いろいろなことを教えてくれた
- ・インドのことを教えてくれた(習慣・言語・考え方・サリーの着方など)、サリーなどいろいろなものをもらった。
- ・インドの歌を歌ってくれた。留学生が帰国前にインドの歌のテープをくれた。
- ・お別れパーティーに誘ってくれた。2~3回遊びに誘われたが、忙しくて行けなかった。
- ・TOEFLの補習をしてくれた
- ・家に誘ってくれたことがあったが、時間があわなくて実現できなかった。
- ・英語を教えてくれた、パーティーに何度か誘われたが行けなかった。
- ・夕食をご馳走してくれた。泊まりに誘われた。
- ・年賀状をくれた。中国のお土産を2回もらった。国際貿易論のテキスト・ノートを持ってきたら教えてあげると言われ、教えてもらった(留学生の得意分野なのでたくさん話してくれて、自分はその日本語を直してい

た)。

- ・学内のコンサートに誘ってくれたが行けなかった。遊びに来てと誘われたが行けなかった。あめをもらった。
- ・お土産をもらった。いろいろ質問してくれて話しやすかった。
- ・昼食に誘ってくれた。学外で会おうと誘ってくれたが行けなかった。中国茶をもらった。
- ・中国語を教えてくれた。電話で餃子パーティーに誘われたが行けなかった。
- ・中国語を教えてくれた、お土産をくれた
- ・家に招待してくれた。プレゼントをもらった。中国語を教えてくれた。
- ・奥さんの送ってくれたものをあげるといってくれた(実際にはその後に会えなくてももらえなかった)、留学生の故郷や家族についていろいろ話してくれた。
- ・中国語を教えてくれた。
- ・台湾語を教えてくれた、コンピュータ室や生協へ一緒に行った、料理店へ行こうなどと誘ってくれたが、時間がなかった。
- ・友人のレポートのために母国の話をしてくれた
- ・駅まで車で送ってくれた。いろいろ話してくれた。友人を紹介したいといってくれた。
- ・宗教や、留学生の家族について教えてもらった。誕生日にアクセサリーをもらった。
- ・(チューターの卒論テーマに関わる) イスラム教のことでわからないことがあったら聞いてくれといってくれた。

F. 各種コメント: 「あなたは留学生の期待にこたえられたと思いますか。」「あなた自身が期待していたことはかないましたか。」の二つの質問の回答の理由部分および「何か心残りなこと、残念に思っていることがあれば、差し支えない範囲で教えてください。」に対する回答(同一回答者のコメントをまとめたもの)

- ・もう少し仲良くなれると思っていた、英語がもう少し使えると思っていた。チュートリアル以外の時間以外にも会えればよかった、もう一人のチューターの出演するコンサートに誘われたが留学生が来られなかった。
- ・宿題を見てあげた、一応日本語を教えてあげられた。留学生の役に立てた。
- ・プライベートに付き合うようになった。
- ・不安の解消には貢献したと思うが、日本語の向上には貢献しなかった。パーティーをやりうと言っていたのに、最後にちゃんとバイバイできなかった(相手の住所も聞けなかった)
- ・友達になりたかった。自分もお手伝いしていい気分になりたかった。相手の留学生にもあきれたし、自分もいい加減になった。
- ・留学生はクールだったが、「ありがとう」といってくれた。手応えはあった。留学生の友人が増えればよかった。「教えられる」と思っていたが、双方向的なものであることが、わかり、自分が役立っているかどうか不安だった。自分が寮生活だったので、一緒に食事したりできなかった。
- ・留学生は「ありがとう」と言ってくれたが自分では役に立った気がしない。
- ・いいチューターだよと何度も言ってくれた。留学生の話の内容が勉強になった。自分の日本語に関する知識が不足していたと思う。
- ・与えられるものより与えるものを多くした。日本を好きになってほしいと思ってがんばった。日本語能力試験2級合格の時、パーティーのときなどに、笑顔で喜んでくれた。留学生、インド人という意識でなく、友達どうしとして付き合えた。もう少し長くいっしょにいたかった。長くなれば出てくる問題にもいっしょに対処したかった。
- ・一生懸命やった、テキスト探しなど感謝された。以前のチュートリアルするときよりしっかりやった。試験に受からなかったが、すごくがんばっていたので残念ではない。
- ・質問の3分の2は説明に納得してもらえたが、3分の1はそうでもなかった。以前の経験と同様に楽しかった。

- ・宿題をやって行って先生にほめられたと言っていた。すっばかされたことがあった。もう少し仲良くなればよかった。
- ・2度中止してしまった。期間が短かった。
- ・毎回「ありがとう」と言われた。わからなかったところがわかった、もやもやしたところがすっきりした、と言っていた。外でもう少し会えたらよかった。
- ・コミュニケーションが十分でなかった。もっと友達ができるかなと期待していたが、そうでもなかった。
- ・感謝している、続けてほしいと言われた。英語上達と思っていたが、アジアの人だった。それがよかった。
- ・留学生が「わかった」といってくれた。教えあいができた。話題が途切れたときに留学生が話題を用意してきたので、こちらも用意していけばよかった。
- ・留学生がいつも「ありがとう」と言ってくれた。自分が留学していたアメリカとは違うことが聞けた。もっと長くやりたかった。自分の卒業が残念。
- ・わかりやすかった、わかったと言われた。お土産をもらった。就職内定先の会社のアルバイト研修で自分が忙しくなってしまう、また留学生もレポート等で忙しく時間外に交流できなかった。留学生がウチに遊びに来てとも言っていたが行けなかった。
- ・留学生は初めは日本人と距離があったが、だんだん仲良くなった。学外で会えあえなかった。専門の経済の方で役に立ってないことがあった。
- ・教えてあげられることが少なかった。専門的なことに答えられなかった。古文や英語も期待していたみただったが、ダメだった。もう少し会えればよかった。
- ・わかるまで教えてあげられた。続けたいと言ってもらえた。初めて中国人の友人ができた。中国人に対して、気が荒い、気が短いというイメージがあったが、留学生がすごく気を使ってくれたのでイメージが変わった。
- ・お土産をくれたり、電話をかけてくれたりして、仲良くなれた。
- ・帰国前にこれからも電話や手紙を下さいねと言われた。授業の補習的なことかと思っていたが、中国の話しが聞けたし、友達になれた。もっと早く知り合えればよかった。
- ・回数が少なかった。少しは留学生の不安・悩みの解消に役立ったと思う。もっと仲良くなればよかった。大学院生の友人を紹介してあげられればよかった。
- ・会えないことがあったので、よくわからない。作文の添削をしたり、学生ことばを教えたりしたら喜んでくれた。友達になれなかった。最後が中途半端だった。
- ・テストの後、できたと言っていた。教えてあげたことを使っていた。教えてあげて役には立ったが、チュートリアルとしてイメージしていたのと違って、ひたすらおしゃべりをしていて。教えてあげることで役に立ちたかった。学年が変わって会うことが少なくなった。
- ・留学生が「わかります、わかります」と言っていた。日本語を学んでいる人がどう勉強しているかがわかった。ゼミの選択にも影響した。もっと話したかった。
- ・自分の実感として頼まれたことはやっていた、会話をたくさんした。日本語を教えるのが難しいことがわかり勉強しなおした。留学生の性格がよく（フレンドリーで寛容）、話しやすかった。反応がよかった。友人が積極的に準備して取り組んでいたが、自分もそうできればよかった。
- ・時間を増やせたはずだが、不足していた。十分交流できず、友達になれなかった。
- ・週1回では少ないが、空き時間があわなくて増やせなかった。楽しかったが、もっと内容を濃くできたと思う。会えたときはよかったが、時間が少なかった。
- ・留学生は話したがっていたが、自分は日本語の先生の要望で仮名もやってと言われ、ニーズがずれて板ばさみになっていた。イスラム教について何かわからなければ聞いてくれと言われたことだけはよかった。もっと希望をかなえてあげられればよかった。お互いに母語でない英語を媒介語にしている面があった。
- ・知っていることを教えてあげられたが、日本語教育の知識が不足していた。友達になれなかった。モンゴル

について、あまり聞けなかった。性格が合わないというだけでなく、こちらから話題なども用意してあげられればよかった。もう少しこちらから電話するなどして面倒を見てあげられればよかった。

G. 今後チューターをする人へのアドバイス

- ・日本語学を勉強しておいたほうがよい。
- ・コミュニケーションなのでケース・バイ・ケース。一般的なことは言えない。相性が大切、相手にあわせて仲良くなるのが大事。
- ・相手と会って話してから決めたほうがよい。性格が合うのが大切。
- ・友達として仲良くやるのがよい。連絡はこまめに。相手の立場で考えてみるのが大切。ある程度辛抱強く、気長に我慢するのも大切。
- ・いい加減にならないように。はじめはつけて、言うことは言った方がよい。無理しないで気楽にやるとよい。
- ・いっしょにおしゃべりすればよい。日本語も英語も使う。空き時間が充実する。それほど大変じゃない。
- ・自分の経験を話せばよい。
- ・自然なわかりやすい日本語で話せばよい。英語がわかってもなるべく使わないほうがよい。教えるという感じなく、友達どうしの感じでやればよい。
- ・自然体で話せばよい。相手の言っていることがわからないときはそのまま流さないで確認したほうがよい。
- ・語彙不足でもいろいろ話せばコミュニケーションできる。直してと頼まれたら遠慮せずに直したほうがよい。趣味なども聞いて話題を豊富にしたほうがよい。
- ・留学生は孤独なので、表情を読み取りながら親近感を高め、友人を紹介するのがよい。政治・経済などの苦手分野も勉強するべき。外国人・留学生というより同じ人間という気持ちで。
- ・すると決めた時点で「教える」という気持ちをもたないこと、共に学ぶという気持ちで。責任を持って取り組むこと。
- ・留学生は日本語を勉強しているから、日本語で接してあげるのがよい。自分の日本語力も試される。教えるというより協力するという気持ちで。つまらないことがあっても責任を持って。
- ・日本語学についてもう少し勉強したほうがよい。
- ・よい経験になる。なるべく日本語で。
- ・勉強の助けが大切なので、友達っぽく仲良くなって、わからないことをきける状況を作ることが大切。
- ・頻繁に会ったほうがよい。自分の希望も告げて、やりたいことを相互に確認したほうがよい。先生と生徒というような関係ではなく、両方が教えあうのがよい。内容がそれていくことあるので、毎回、その日の目標を確認したほうがよい。
- ・ある程度相手のことを知っているるとよいし、留学生にも日本のことをしろうと努力してもらうほうがよい。
- ・相手の立場に立って考えることが大切。
- ・相手の希望、ニーズを把握するとうまくいく。時間を守るなど、信頼関係が大切。
- ・とりえず仲良くなること。自分の留学中の経験では、質問しやすいフレンドリーなチューターと硬めのチューターが両方いるとよい。
- ・時間外にも普段の付き合いができるるとよい。他の友人も呼ぶなどして遊びに行ったり来たりできるとよい。
- ・いろいろ話して相手をよく理解してから進めるとよい。まずは仲良くなるのが大事。プライバシーに関しては突っ込みすぎないほうがよい。
- ・自分にも相手にもプラスになる。教えるだけでなく学ぶことも多いのでどンドンやったらよい。恋愛の話はどこまで突っ込んで話してよいかかわからない。似ている部分もあるが、違いも大きい。仲良くなるのも大切だが、適度な距離も必要。考えかたのちがいがい突き詰めないで、受け入れることが必要。時間の約束をきちんと。

- ・相手と仲良くなれば楽しい。
- ・日本語が十分でない人の場合でも、なるべく日本語で。
- ・相手に興味を示すことが大切。楽しくやればよい、これをしなければなどと考えないで。
- ・その人なりにがんばればよいと思う。
- ・自分一人でわからないときは友達などにきいてアドバイスをもらおうとよい。相手に約束を守ってもらえるようにする。
- ・楽しい。日本語を教えるのは大変。
- ・楽しい。普段経験できないことが経験できる。勉強になる。やってみたら。
- ・ぜひやってほしい。なるべく日本語で。相手に関心を持ち、相手の話を聞くのが大事。相手の国の文化・背景を知っているとよい。自分も日本文化の紹介ができるとよい。特技があるとよい。
- ・できるだけ会う時間を決めて、コンスタントに会うのがよい。
- ・仲良くなれたらよい。教えるというより手伝うぐらいの気持ちで。
- ・相手の日本語レベルをしっかりと把握することが必要。相手のニーズと折り合いをつけてやっていくことが大切。
- ・楽しいことも楽しくないこともある。